現在の性差別社会の中で、わたしたちが**女として女を愛する**のはすばらしいことである――　わたしたち女性同性愛者の存在は、女の中にある**可能性**であり**新しい生き方への試み**なのである。**女から女への出会い**を求め、わたしたちはこの雑誌をつくった。

――『すばらしい女たち』創刊号より

性的マイノリティ関係資料シリーズ1

レズビアン雑誌資料集成

全3回配本
全7巻

2024年春、刊行開始！

『すばらしい女たち』創刊号表紙（絵：楽白雀）

不二出版

性的マイノリティ関係資料シリーズ1

レズビアン雑誌資料集成

全3回配本
全7巻

本集成の特色

1970年代後半から1990年代前半までの、首都圏で展開されたレズビアンによる表現活動・社会運動の軌跡を、彼女たちが発行したミニコミ誌と諸資料で跡づける、はじめての本格的な資料集成。

編集・解説 ◎ **杉浦 郁子**（立教大学教授）
推　　薦 ◎ **出雲 まろう**（編集者 / クィア・シネマ批評）　**赤枝 香奈子**（追手門学院大学教授）・**清水 晶子**（東京大学大学院教授）
協　　力 ◎ **沢部 ひとみ**（パフスクール共同代表）　**れ組スタジオ・東京**
資料提供 ◎ **織田 道子**（東京・強姦救援センター相談員）
揃 定 価 ◎ **160,600**円（本体146,000円＋税10%）
体　　裁 ◎ B5・A4判／上製／布クロス装／合計約2,700頁
別　　冊 ◎『レズビアン雑誌資料集成 解説・総目次』（仮）／約150頁
予価 2,200円（本体2,000円＋税10%）　※分売可　**ISBN978-4-8350-8797-9**
刊行予定 ◎

第1回配本（全2巻）	定価 **44,000**円（本体40,000円＋税10%）	ISBN 978-4-8350-8786-3	2024年5月
第2回配本（全3巻）	定価 **66,000**円（本体60,000円＋税10%）	ISBN 978-4-8350-8789-4	2024年8月
第3回配本（全2巻・別冊「解説・総目次」）	定価 **50,600**円（本体46,000円＋税10%）	ISBN 978-4-8350-8793-1	2024年10月

※収録内容、巻構成、定価は変更となる場合がございます。

お薦め先 ◎ 社会学、ジェンダー・LGBTQ+研究、女性史、メディア研究、社会運動などの研究者。大学・専門図書館など

『すばらしい女たち』（1976年11月）、目次部分イラスト。

『レズビアン雑誌資料集成』全7巻　収録内容一覧

配本	巻数	誌名ほか	発行／著者	発行年月日
第1回配本	1	『れ組通信』第1—22号 『れ組通信』第1—3号　※れ組スタジオ・東京を発行元に変更。	れ組のごまめ れ組スタジオ・東京	1985年5月－87年3月 1987年3月－5月
	2	『れ組通信』第4—20号	れ組スタジオ・東京	1987年7月－88年11月
第2回配本	3	『れ組通信』第21—40号	れ組スタジオ・東京	1988年12月－90年7月
	4	『れ組通信』第41—60号	れ組スタジオ・東京	1990年8月－92年3月
	5	『れ組通信』第61—75号 「れ組スタジオ東京」〔資料〕 『女たちのエイズ問題 わたしたちはなぜ反対したのか？』 『第一回ALN会議報告集 はばたけアジアのれすびあん』	れ組スタジオ・東京 エイズ予防案に反対する女たちの会 ALN日本 第一回ALN会議報告書作成グループ	1992年4月－93年6月 1987年3－7月 1989年11月 1991年11月
第3回配本	6	『すばらしい女たち レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌』創刊号 『すばらしい女たち別冊〈レスビアンに関するアンケート〉集計とレポート』 『ザ・ダイク』第1号 『ザ・ダイク』第2号 『ひかりぐるま』創刊特別号 Vol.1 『ひかりぐるま』秋季号 Vol.2 『Eve & Eve』第1号 「ポルノグラフィは女への暴力である」『あごら 女と情報』第25号 「ポルノグラフィは女への暴力である／女のエネルギーを女へ！」 『女・エロス』第16号 「ポルノグラフィは女への暴力である」〔スライド用カードとリバーサルフィルム〕 『声なき叫び』〔パンフレット〕	「すばらしい女たち」編集グループ まいにち大工 ひかりぐるま 若草の会 織田道子 レズビアン・フェミニスト・センター・スライドグループ 「声なき叫び」上映グループ	1976年11月 同 1978年1月 1978年6月 1978年4月 1978年9月 1982年8月 1981年12月 1981年5月 — 1982年
	7	「異性愛強制というファシズム」『新地平』第150号 『瓢駒ライフ 新しい生の様式を求めて』第1—7号	広沢有美 ひょうこま舎	1987年6月 1988年5月－92年9月

※第6.7巻はA4判、2面付（部分）を予定。

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 00160-2-94084

表示価格はすべて税込

2024.4.

女性解放をめざす、すべての女たちとの連帯を

――刊行にあたって――

杉浦郁子

「女を愛する女たち」の活動の軌跡は、女性運動においても、同性愛者の運動においても、埋もれやすい。前者においては異性愛の女性が、後者においては同性愛の男性が、運動のマジョリティだからである。だが、パソコン通信やインターネットが普及する以前のマイノリティの軌跡は、幸いにもミニコミ誌というメディアに残された。

この『レズビアン雑誌資料集成』に収録したミニコミ誌――自主制作された少部数出版物――は、一九七〇年代後半から九〇年代初めにかけて「女を愛する女たち」が首都圏で発行したものである。一九七六年一月、リブ新宿センターに出入りしていた女性たちが中心となって発行した『すばらしい女たち レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌』の冒頭、「雑誌の発刊にあたって」からは、その思想の特徴が確認できる。

女と男の関係が唯一の性愛関係であるとする考え方は、男中心社会が秩序維持のために必要とした幻想である。私たちの性愛感情に限界はない。

異性愛を「自然な生物学的現象」ではなく「男性優位を維持する政治的関係／社会制度」ととらえるこうした視点は、一九六〇年代後半以降に女性解放運動のうねりをつくり出したラディカル・フェミニズムの基本的視座のひとつである。文章はさらに続く。

わたしたちは女として女を愛し、それを積極的に受けとめ選び取るようになった。現在の性差別社会の中で、わたしたちが女として女を愛するのはすばらしいことである。……わたしたち女性同性愛者の存在は、女の中にある可能性であり新しい生き方への試みなのである。

女が女を愛することを「女の生き方」を拡げる実践ととらえ、その生き方をセクシズムに抵抗しうるものとして位置づける視点。それを踏まえたうえで「女から女への出会いを求め、わたしたちはこの雑誌をつくった」とまとめられることばを読むとき、この『すばらしい女たち』という小さな雑誌が、ばらばらに孤立してきた女性同性愛者同士の連帯のみならず、女性解放をめざすすべての女たちとの連帯を呼びかけるものであったことを、私たちは理解する。

本誌編集グループは創刊号の発刊をもって解散したが、その後も「レズビアン」というカテゴリーのもと、有志によって数々のミニコミ誌が発行された。それらは日々の生活のなかで秘匿せざるをえない経験が自由に表現され、蓄積されていく場だった。

むろん、「レズビアン」といえども、家族との関係、世代、学歴、職業、住んでいる地域、国籍、障害の有無など、その経験に同じものはない。だが、一人称で綴られた個別の生の記録からは、女性の劣悪な就労環境、無償ケア労働を当然視する日本社会というものの かたちが、一様に浮かび上がってくる。「女が女を愛すること」の葛藤や価値について考えることは、女性が社会のなかで置かれる立場を考えることと切り離すことができない。

本集成は、『すばらしい女たち』のあとに制作された『ザ・ダイク』『ひかりぐるま』、一九八〇年代前半の「レズビアン・フェミニスト・センター」の関連資料、八〇年代半ばから九〇年代前半までの『れ組通信』『瓢駒ライフ』などを収録する。ミニコミ誌を通じたやりとりはつながりや場所を生み、レズビアンのアクティビズム、コミュニティ、カルチャーと呼びうるものを出現させた。その意味でこれらの資料は、確かに同性愛解放運動の記録である。だが、その意義を十分に汲みとろうとするのであれば、同時代のウーマンリブやフェミニズムの動きを念頭に置くことが欠かせない。したがって、これらのミニコミ誌は、女性運動の歴史をとらえる基礎資料でもある。

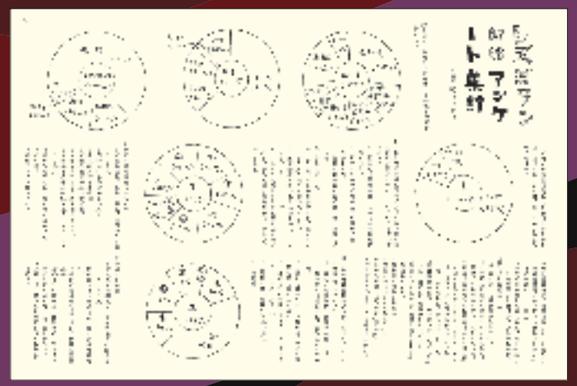
「女を愛する女たち」の思想や実践が、同性愛者のみならず、すべての女性の解放を推進する大きな力であったことを、ここで確認してほしい。

（すぎうら いくこ・立教大学社会学部教授）

復刻に際して

1970年代前半から大きなうねりとなって社会の変革を志したウーマンリブ、そしてフェミニズム運動のなかでも、とりわけ困難な状況を打破しようと試みた「女性同性愛者（レズビアン）」の女性たち。その立場を彼女たちみずからが鮮明に表現したこれらのミニコミ誌こそは、「レズビアン」という言葉の意味をプラスに転換し、そこから新たなコミュニティを形成する重要な第一歩だった。これらの誌面からは、現状打破を強く願う女性たちの叫びと、未来の可能性を信じる力があふれている。社会の変革と自身のアイデンティの確立をめざしたこのミニコミ誌群は、多様化する性的マイノリティ問題の歴史を捉えなおすための最重要の資料といえるだろう。

本集成は『れ組通信』創刊号から1990年代前半まで、さらに『すばらしい女たち』『ひかりぐるま』『瓢駒ライフ』その他資料を集成する。すでに散逸と忘却の危機に瀕しているこれらの資料群はこれからのジェンダー研究、性的マイノリティ理解を深めてゆくため、そして広くこの社会に生きる個々人の尊厳と自由とを拡大するための、豊かな力をもたらすものと確信する。　――不二出版編集部



◆1976年11月というきわめて早い段階で創刊された『すばらしい女たち』の著者紹介頁と、別冊アンケート（部分）。1972年設立のリブ新宿センターに出入りしていた、4人のレズビアンが実施したアンケートをきっかけに本誌が創刊された。ウーマンリブ運動の経験が生かされた本誌からは、草創期の自由闊達な雰囲気が伝わってくる。

◆左上から下に『声なき叫び』／『瓢駒ライフ』第1・5号／『Eve & Eve』第1号／『ひかりぐるま』第1・2号／『ザ・ダイク』第1号／『女たちのエイズ問題』／『第一回ALN会議報告集』の各表紙。どの表紙もレズビアンとしての自身を表現する、知的で挑戦的な試みだった。

◆左『瓢駒ライフ』第1～4号（1988-89年）に掲載された「愛の牡丹雪」最終回。橋本治の原作をはたなかえいこが漫画化。女性同士の共同生活を描く。

◆右『すばらしい女たち』第1号のかわはら狩戸「どこまで行こう」冒頭頁。レズビアンとしての自身を再発見するまでが語られている。

——クィアをめぐる生きづらさのなかで、力尽きてしまう前に声を上げること。……これらの資料の復刻が、……蔓延するヘイトスピーチ社会を生きる次世代への示唆になれば、と願います。——

——女を愛する女たちはそれまでもいた。……しかし、自分たちに押しつけられた、あるいはみずから引き受けたこうした「名づけ」と真正面から向き合い、その意味について深く考え、悩み、試行錯誤しながら、生の可能性を広げようとした女性たちは、いなかったのではないだろうか。——

『すばらしい女たち』発行のころ　覚え書き

出雲 まろう

一九七〇年代の日本では同性愛は公序良俗に反するものとされていた。強制された結婚を逃れて同性カップルが駆落ちをすれば、家族の命を受けた私服警察が全国を探し回り、連れ戻しに反抗すれば「公務執行妨害で逮捕する」と脅されたりした。

日本初の女性同性愛者の集まり「若草の会」の広告は、どんなに大金を積んでもまじめな雑誌や出版物に載せることがかなわず、やむをえずエロ雑誌に載せるか、女子トイレの壁に貼るしか方策がなかった。この「若草の会」の会計報告をめぐって批判した数名による「レズビアン向けアンケート集計」（当時はＬＢＴＱ＋というカテゴリーがなかったため性的マイノリティ女性をレズビアンと一括総称した）の初顔合わせ座談会こそじつは、出席者のだれにとっても大きな「違和感」だっただろう。生い立ち、背景の違いはもちろん、ノンポリもいればリブ活動家、セクシュアリティを政治的に選択した人たちもいて、座談会は最初から喧々諤々の大論争になったのだが、レズビアン（ＬＢＴＱ＋）当事者の声を伝えたいという動機は一致した。ミニコミ誌の発行である。その日から毎週末、リブ新宿センター（以下、リブ・セン）に集まった有志が版下作成に従事することで座談会は終決した。

なぜリブ・センだったのか。新左翼系リブ活動家の拠点が政治的選択レズビアン以外の性的マイノリティ女性に対してフレンドリーだったわけではない。むしろつねに批判の的としてさらされる空間ですらあった。ただ当時、公序良俗に反する雑誌を印刷できたのは、リブ・センのメンバー三人による女だけの写植印刷屋「あいだ工房」を介して発注する以外に方法がほとんどなかったのである。当時はまだ手軽なコピー機もパソコンもなく、発行物はレイアウト用紙に活字を切り貼りするという版下作成作業を経た後、印刷所にもち込まれた。

刷り上がった『すばらしい女たち　レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌』は、各地のアンダーグラウンド書店やリブ系カフェへ発送する手筈になっていた。茶紙に梱包した数十個の包みを積み込み、車は深夜の甲州街道をのろのろと進んだ。大きな交差点の赤信号で止まると、急に警察官が現れ、路肩に車を寄せるよう合図して、「トランクを開けろ」と無言で指示してきた。リブ活動家の運転するその車はつねに警察にマークされており、交差点ごとに止めて調べられるということを、同乗する車のなかでそのとき初めて聞き知った。警察官の心情ひとつで小包の押収や逮捕となる不穏さも孕んでいたのだが、警察官は車を運転していたひとり（後に『れ組通信』責任編集者となる）に対してだけ、しつこく調書を取りはじめた。そのすきに、平静を装って同乗の三人（後の『ザ・ダイク』発行メンバー）でタクシーを呼び止め、数十個の小包をトランクへ移し代えて、かろうじて没収の危うさは免れたのだった。

クィアをめぐる生きづらさのなかで、力尽きてしまう前に声を上げること。ミニコミ誌発行のもつ意味とは、シスヘテロ家父長社会の変革を希求するＬＢＴＱ＋の「違い」を超えた「共闘と可視化」の試みだった。あれから約半世紀の歳月を経て、消滅の危機にさらされているこれら資料の復刻が、一部の理想化や歴史修正主義に加担することなく、蔓延するヘイトスピーチ社会を生きる次世代への示唆になれば、と願います。

（いずも まろう・編集者／クィア・シネマ批評）

「女を愛する女たち」という希望

赤枝 香奈子

この『レズビアン雑誌資料集成』に収められているのは、「レズビアン」や「女性同性愛者」という、当時としては決して肯定的なものではなく、また受け入れやすくはない「名づけ」を引き受けた女性たち、あるいはその「名づけ」に希望や可能性を見い出し、アイデンティティとしていった女性たちの思考と格闘の軌跡である。

女を愛する女たちはそれまでもいた。愛し合う者同士、ともに暮らす女たちもいた。しかし、自分たちに押しつけられた、あるいはみずから引き受けたこうした「名づけ」と真正面から向き合い、その意味について深く考え、悩み、試行錯誤しながら、生の可能性を広げようとした女性たちはいなかったのではないだろうか。

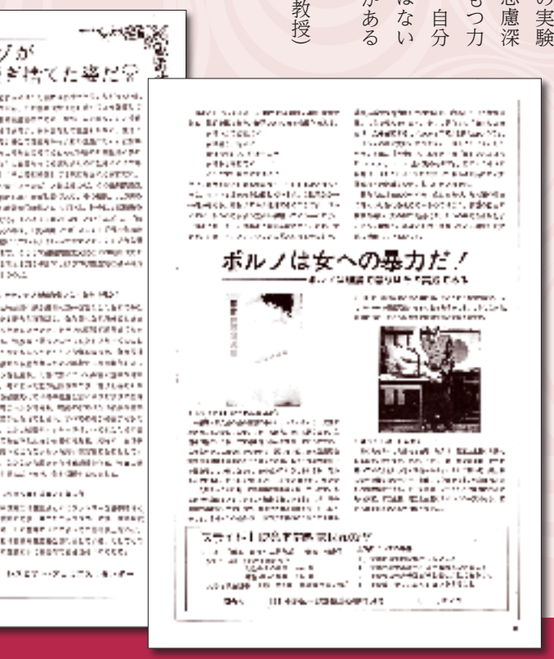
異性を愛し、異性と結婚し、その相手の子どもを産むことが当然視されている社会で、同性を愛し、同性と親密な絆をつくって生きていこうとすることは、新たな生活様式を生み出すことにほかならない。誰もいない荒野に放り出され、木を伐り、土を耕すところからはじめるような気の遠くなる作業であるが、幸いなことにそこには仲間たちと、直接会ったことはないが過去にたしかに存在していた先輩たちの記憶があった。そして何より、異性の顔色をうかがうことなく、自分の欲望や理想に従い、みずからの人生をつくり上げていく自由や喜びがあった。

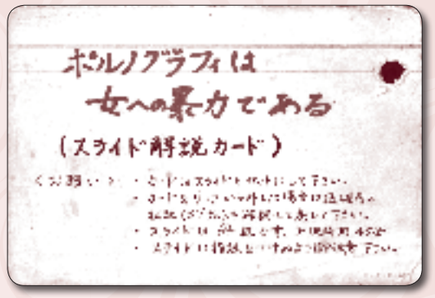
もちろん、過度な美化や理想化は危険だ。なぜなら、女を愛する女たちもこの社会の一員である以上、その規範や制度の制約から、簡単に逃れられるわけではないからである。自分自身にも染みついたジェンダーやセクシュアリティの規範、なかなか変わらない社会への憤りや絶望、思い描いた通りにはいかなかった人間関係などに疲れ果て、去って行った女性たちも少なからずいたであろう。ここに収められた資料は、そのような女を愛する女たちの、挫折や失望も含めた経験まるごとを知るための、重要な手がかりとなるものである。

日本にまだ女を愛する女たちの専門的な雑誌がなかった時代、『すばらしい女たち』や『れ組通信』などのミニコミ誌に掲載された内容は多岐にわたった。さまざまなエッセイや論考、小説や漫画などの創作、座談会、訪問記やインタビュー、アンケートの調査結果、海外の論文翻訳、小説や映画などの紹介、イベントやお店の案内、読者からの手紙など、女を愛する女たちにかかわるあらゆる情報が、一部一部は薄い冊子のなかにぎゅっと詰め込まれている。そこには、物事に向き合う真摯さと同時に、友人同士がおしゃべりしているときのような軽やかさやユーモア、茶目っ気まで感じられる。

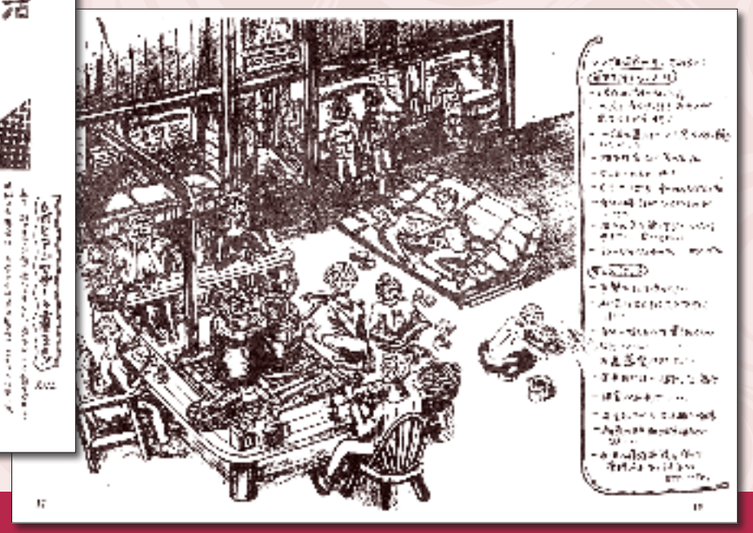
日本の「レズビアン」運動をその最初期からたどることで、わたしたちは女を愛する女たちが何を獲得し、彼女たちを取り巻く環境がどこまで変わったのかを知ることができる。そしてこの先に続く世代へと、その記憶を引き継いでいくことができる。彼女たちの実験精神、喜怒哀楽、饒舌さ、大胆さ、慎重さ、思慮深さに触れることによって、わたしたちは女性がもつ力と可能性にあらためて勇気づけられると同時に、自分がまだ人生を十分に生き切ってはいないのではないか、わたしたちの人生にはもっと豊かな可能性があるのではないかとの思いも抱かされるのだ。

（あかえだ かなこ・追手門学院大学社会学部教授）





◆1980年に活動をはじめたレズビアン・フェミニスト・センター（LFセンター）は、反ポルノグラフィ運動を精力的に展開、「ポルノグラフィは女への暴力である」をスライド上映、また強姦を主題とした映画『声なき叫び』（アンヌ・クレール・ポワリエ監督、カナダ、1982年）を上映、83年には東京・強姦救援センターを設立した。左奥はパンフレット『声なき叫び』より。上は上映時に解説するためのカードとスライドの1部。上映にあたっては、「代表者・解説者は女性であること」「女性の参加者が必ず半数以上であること」などのルールが課された。



◆『れ組通信』第9・10号合併号（1987年12月）は、それぞれの体験や「共同生活の心得一覧表」からなる特集「レズビアンと共同生活」を企画した。本誌では「男のいやがらせ」「国際恋愛」、セックスやマスターベーションなど、生活と性に直結するさまざまなテーマが、真剣かつ軽やかに議論されている。

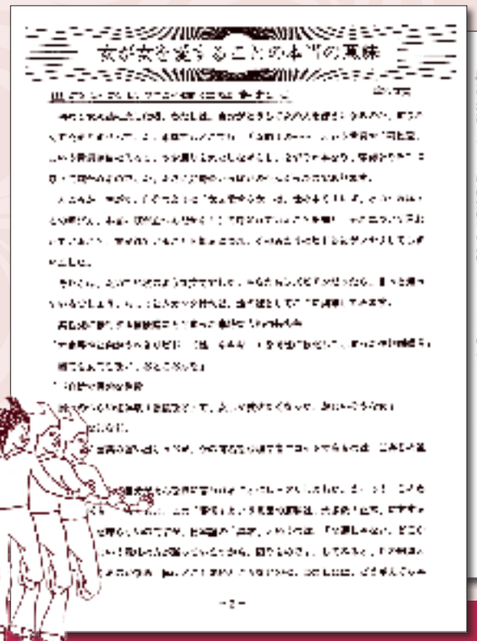
途切れ途切れの歴史が立ち消えてしまう前に

清水 晶子

私たちは私たちの歴史をよく知らない。

その自覚は気もちの裏にこびりつくようにして、ずっとあった。けれども、初期のクィア理論の文献を

◆『れ組通信』は、スライド「日本のレズビアンたち」製作を目指して集まった５名のレズビアンによる「れ組のごまめ」によって、1985 年５月に発行を開始した。その後、日本ではじめてとなるレズビアンのための事務所「れ組スタジオ・東京」が結成され、『れ組通信』が引き継がれる。本集成では 1993 年６月発行の第 75 号までを収録した。上は 1987 年３月発行の「ごまめ」版の最終号表紙。メンバー６名の特徴がコミカルに描かれている。
◆左上はその後展開された『れ組通信』表紙。



◆左から、広沢有美「女が女を愛することの本当の意味」（第２号、1987 年４月）、敦賀美奈子「Sex は、コミュニケーションの手段である。」（第 11 号、1988 年２月）、葉月いなほ「行ってよかった！国際レズビアン会議」（第 11 号、1988 年２月）の冒頭部分。誌上ではレズビアンとしての自身のアイデンティティとその生の在り方への考えを深め、それを社会に打ち出すさまざまな試みが展開された。

——私たちは、「私たちの歴史」をよく知らない。現在、私たちが直面し
政治的な議論や文化的な課題を、私たちよりほんの少し前の「私たち」
論し思考し、何らかの対応策や解決を見い出していたとしても、しばし
ことを知らないままに、手探りでゼロから出発することを余儀なくされて

読んで研究者として育った世代のクィア・フェミニストだった一九九〇年代の私は、正直なところ、「私たちの歴史」にあまり興味をもてずにいた。そもそも、「私たち」を所与のものとする歴史の重力に抗うのがクィアであるかのように、表面的にはみえていた当時、「私たちの歴史」に注意を向ける重要性を十分に理解するのは、私には難しかったかもしれない。

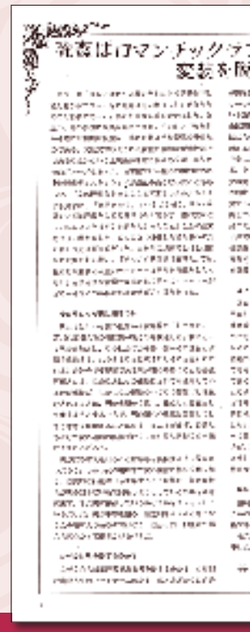
けれどももちろん実際には、クィア理論はそれを要請するに至る「私たちの歴史」を踏まえてはじめて成立し、理解され、そして何より力をもつものだった。例えば、ラディカル・フェミニストたちによる性と権力とに関する議論。ブラックやラティンクス（ラテン系住民）、そして労働者階級を中心とするレズビアン・バーで育まれたブッチ／フェムのレズビアン・ジェンダー。SMダイクの実践やドラァグ・コミュニティを背景とするジェンダー撹乱への考察。レズビアン分離主義。ブラック・レズビアンたちによる性差別と人種主義、異性愛主義の交差性への指摘。そしてHIV／AIDSの流行と社会的パニック、それに対抗するアクティビズム。抽象的な批評理論の用語を散りばめた初期のクィア理論は、そのすべてと関わっていた。

「私たちの歴史」とクィア理論との連続性に気がつくことは、現在の私たちがジェンダーとセクシュアリティの文化と政治とにコミットするにあたって、「私たちの歴史」そのものがいかに重要な資源となり得る

れ共有され、繰り返し分析され、批判されたりインスピレーションの源になったりしてきた英語圏に比べると、日本語圏での「私たちの歴史」の資料は、個人や団体にバラバラに散らばっており、入手はおろかその存在の確認さえ難しいことも多いし、口頭で直接教わってはじめて知ったり理解できたりする事も少なくない。

「私たちの歴史」はだから、途切れ途切れで、裏づけを欠いた噂話のようだったり、あいだを埋めるピースが見あたらないままのパズルのようだったりする。それは、「私たち」の書くものや言うことを軽視してきた文化のせいでも勿論あるし、そのような敵対的な文化を前にして、「私たち」相互の批判だの、信条や見解の相違だのまで含む赤裸々な資料を「外」に出すまいとする、「私たち」の側の戦略でもあったかもしれない。

いずれにせよ私たちは、「私たちの歴史」をよく知らない。現在、私たちが直面しているのと同じ政治的な議論や文化的な課題を、私たちよりほんの少し前の「私たち」が同じように議論し思考し、何らかの対応策や解決を見い出していたとしても、しばしば私たちはそのことを知らないままに、手探りでゼロから出発することを余儀なくされている。「私たち」の思考を豊かにするはずの水脈に、私たちはうまく根をおろせていないのだ。

このたび刊行される『レズビアン雑誌資料集成』は、その途切れ途切れの歴史を散逸させない試みの、重要な一歩である。もちろん私たちの歴史はここからはじまるわけでも、ここで終わるわけでもない。今回は収録できなかった「私たちの歴史」も、もちろんあるだろう。それでも、ここにあるのは貴重な資源への最初の確かなアクセスである。私たちはそこから「私たちの歴史」を踏まえて——その「私たち」にはもともと誰が含まれ、それについてどのような議論があったのかを含めて——現在を考え、そして生きぬく可能性を受け取るのである。私たちは、私たちの歴史を知らなくてはならない。この資料集成がそれを容易にする力強い補助となってくれることを、確信している。

（しみず あきこ・東京大学大学院総合文化研究科教授）